

視写 「河童」

芥川 竜之介

名前（ ）

▽僕は水際の岩に腰かけ、とりあえず食
 事にとりかかりました。コンビーフの缶
 を切ったり、枯れ枝を集めて火をつけた
 り、――そんなことをしているうちに十
 分はたったでしょう。その間にどこまで
 も意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れ
 かかりました。僕はパンをかじりながら、
 ちよつと腕時計を覗いて見ました。時刻
 はもう一時二十分過ぎです。が、それよ
 りも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、
 円い腕時計の硝子の上へちらりと影を落
 としたことです。僕は驚いてふり返りま
 した。すると、――僕が河童というもの
 を見たのは実にこの時が初めてだったの
 です。僕の後ろにある岩の上には画にあ
 る通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を
 抱え、片手は目の上にかざしたなり、珍
 らしそうに僕を見おろしていました。△

																				▼
▲																				